

親を生涯発達の観点から捉える試み（その5）
—— 家族の中の対人関係・相互作用と発達 ——

Parental development from the
viewpoint of life span development (Part 5)
: Interpersonal relationship and interaction of family

林 昭 志
Hayashi Shoji

要 旨

本研究ではまずこれまでの親の生涯発達に関する研究を概観した。次に家族の中の相互作用に関する用語を整理し定義し、相互作用・対人関係の分類を行った。次に両親を対象とした調査を行い、親子・夫婦・きょうだい・祖父母の相互作用・対人関係などを明らかにすることを試みた。この調査の結果、親の多くは子どもと接するとき心にかけていることがあること、夫婦での話し合いをするようにしていることなどが明らかとなった。また親からみたきょうだい関係として、きょうだい同士の関わりあいは活発であること、子どもの成長に伴ってきょうだい関係が大きく変わっていることなどが明らかとなった。また祖父母には独自の役割があることが示唆された。

キーワード：親、家族、生涯発達、対人関係、相互作用

1. はじめに ～親と家族の発達の研究の概観

これまでの親や家族の生涯発達の研究には次のようなものがある。まず林（2005）はエリクソンの生涯発達理論の観点から子どもや親が生涯にわたって発達していく過程について述べた。親の発達は子どもの発達と深く関係しあっており相互作用していることが考えられた。次に林（2006）では出生順位によるきょうだいの性格の違いなどから親の子育ての発達がみられることを指摘した。つまり長子には親は不安や心配が高く、その結果、慎重で控えめな長子的な性格が形成されるし、次子には親はより自信を持って臨めるので快活で甘えん坊な次子的な性格が形成される。また親の発達を示す用語を解説した。さらに林（2007）では大人と子ども

の発達の違いを考察しながら、親の発達の特徴を考察した。また親の発達権および家族の機能について述べた。さらに調査結果から子どもの人数が2人の場合は子どもの人数が1人の場合と比べて親の疲労感が高いことが推察された。

以上の研究から結果をまとめると親子への支援は親と子の双方が発達する権利を保障するために子どもとその家族の発達や権利を視野に入れて、人間の生涯発達の視点に立っていくことが必要ということである。

さらに林（2008）では家族の成員の増加と対人関係の複雑化について考察した。第1子の誕生が最も対人関係の増加率が高く、その後に子どもが誕生しても増加率はどんどん低くなる一方なのである。これより考察すると子育て支援を必要としているのはまず第1子が誕生した家庭である。初めての幼い子どもに対してどのように対処していけばよいのかわからないという問題を抱える家族である。次に支援を必要としているのは第2子の誕生した家族である。第2子が誕生すると子育ての負担が倍増する。しかもきょうだい喧嘩などのきょうだい関係の問題に取り組まなければならなくなる。このような理由から第2子の誕生した家族ははじめて子どもが誕生した家族とは異なった子育て支援を必要とする。また林（2008）では家族の個性を現す用語として家族性と家族史と家族差について述べた。

このようなこれまでの親の発達の研究結果の内容を表にまとめた。これからわかることはこれまでの研究では家族内の対人関係や相互作用について詳細に検討してこなかったことである。そこで親の発達の研究においては家族内の対人関係や相互作用について研究することが必要である。

表1 筆者のこれまでの研究のまとめ

林（2005）	親の生涯発達をエリクソンの生涯発達の理論と重ね合わせた。また親も子どもと同様に発達することを指摘した。しかも親と子どもの発達は相互に影響を与え合っており相互作用していることを指摘した。
林（2006）	親が発達している証拠として、出生順位によるきょうだいの性格の違いを挙げた。また親の発達に関連する用語をまとめた。（母性、親性など）
林（2007）	1. 子どもと大人の発達の特徴の違いについて述べた。 2. 親の発達の権利について述べた。 3. 子育て家族の社会的機能について述べた。 4. 子育て家庭の家族関係の複雑化について述べた。 5. 調査結果について述べた。1) 子どもの人数が1人の親：やはり親になることは人生や生活の仕方に大きな変化を与えられた。2) 子どもの人数が2人の親：親の発達に関する質問に対しては、同じ回答者が、自分が確かに変わったと思うという成長を感じていると同時に、一方で、自分が変わることに對してもっと必要性を感じている様子がうかがえた。3) 悩み・問題・喜びの質問に対しては、これまでのしつけの方法に対する反省や悩みが挙げられた。4) 子育て支援に関する項目では昔に比べれば良くなったという回答がある一方で、経済的な支援が足りないという回答や、病気のときに一時的に預けられないという回答があった。5) また子どもの人数が2人の場合は子どもの人数が1人の場合と比べて親の疲労感が高かった。

林 (2008)	1. これまでの研究を概観した。 2. 親に関する用語をまとめ直した。(母性、父性、親性、養護性、生産性、親権、監護権、親の発達権、家族の発達権) 3. 家族の成員の増加と対人関係の複雑化について考察し、第1子が誕生した家族と第2子が誕生した家族の対人関係の違い(きょうだいの問題の有無)を指摘した。 4. 家族の個性を現す用語として家族性と家族史と家族差について述べた。 5. 子育て家庭の発達における一般の問題を述べた。 6. 生涯発達の視点について述べた。 7. 子育てで支援や家族支援・親支援について述べた。 8. 両親を対象にして調査を行った。1) 親子や家族の類似性: 親子が似ている点が「多いと思う」という意味の回答がいくつもあった。似ている点は話し方・行動・性格・感情表現を中心にして捉えられていた。また父親も子どもと似ているという実感を持っていた。親子または家族で行動の仕方が似ていることが多いと思うかどうかという点に関しては子どものマイナス面に注目しやすいという特徴が現れた。多くの親が自分の家族は他の家族とは違うという点をときには意識していた。2) 子どもの成長につれての悩みや問題の変化: 困っていることや悩んでいることの変化に対しては、変化したという回答が多くみられた。具体的には、小さいころは発育面が順調かどうかなどであったが、友だちとの関わりへと変化したという意味の回答があった。子どもの成長につれて家族の生活スタイルが変わったかという点に関しては、変化したという回答が多かった。生活時間の変化(入浴・就寝・朝食などが早くなった)、休日の過ごし方の変化(外食や旅行を控える、休日は公園に行くなど)など。特に母親では大きく変化したという回答が多かった。父親では変わらないという回答もあった。3) 子どもの成長の満足感と子育ての展望: 親として子どもの成長に満足していますかという点に関しては、基本的には満足しているという意味の回答が多かった。子育てにおいて今後はどのような問題がありますかという点に関しては、やはり金銭面での問題、住居(子ども部屋)のことが挙げられた。また友達と仲良くできるか、学校での子どもの変化、思春期での対応、なども挙げられた。
----------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

2. 家族の中の相互作用・対人関係とその分類

前回の研究(林、2008)の「家族の成員の増加と対人関係の複雑化」のように家族成員の増加により対人関係は複雑化する。ただし一方で対人関係の増加率は減少する。家族の成員が増えるにつれて家族関係は複雑化するのには家族の対人関係や相互作用が複雑になるからである。

では家族成員の間でどのような対人関係・相互作用が生じるのだろうか。

その前にまず対人関係や相互作用の用語の定義をしたい。相互作用、対人関係、家族関係、関わり、関わり方、関わり合い、接し方、などは厳密に定義すればそれぞれ区別されるものであるだろう。

まず人と人が接することが最初にある。その場での一時的なやりとりがこれにあたる(具体的であることも多い)。このやりとりの方法が接し方になる。関わり方には接し方が含まれる。次に接することが積み重なって、関係(関係性)というやや大きな概念になる。この関係には時間的に変化しないという持続性と、親密・疎遠などの抽象性を含めている。

このような具体的で一時的な接し方を離れた概念として対人関係がある。対人関係は厳密には2人の人間同士の関係である。人間関係は対人関係を含めた2者以上の人間同士の関係であ

る。さらに2人以上の家族の成員の関係を含めた概念として家族関係がある。家族関係はもし3人家族であれば3つの対人関係を含んだものである。

一方で相互作用とはお互いに影響を与え合う関わり合いのことである。相互作用とはお互いが言語的もしくは非言語的にコミュニケーションを取り合うことによる関わり合いのことである。わかりやすくいえば家族との関わり方、接し方ということである。

また関わりとは接し方や関係を日常的に親しみやすく、わかりやすく言い換えたものである。

以上のようにこれらの定義は心理学的研究からみると大まかで曖昧な印象を受ける。しかしここではまだ家族研究の試みの段階であり明確な区別と定義をする必要がないので、大まかに定義しておくことにする。以上の内容を表にまとめた。

表2 対人関係や相互作用に関する用語の定義の試み

接する	その場での具体的で一時的なやりとり。
関係	接することが積み重なってできたやや大きな概念。時間的に変化しないという持続性と、親密・疎遠などの抽象性を含める。
人間関係	具体的で一時的な接し方を離れた関係の概念。
対人関係	人間関係と同様であるが、厳密には2者関係に用いる。
家族関係	2人以上の家族の成員の関係。
相互作用	互いに影響を与え合う関わり合い。言語的・非言語的コミュニケーションのよ うに具体的なやりとりを指す。
関わり	接し方や関係を日常的に言い換えたもの。

さて家族成員の間でどのような対人関係・相互作用が生じるのだろうか。まずは家族内の相互作用・対人関係を分類することから始める。ここで注意すべきことは現在多様な家族が存在しているということである。本論で分類した対人関係は多様な家族の一部にすぎないものである。たとえばきょうだいのいない家族、シングルマザー・シングルファーザーの家族もあるのである。

1) 親子同士

子どもが小さいうちは親が子どもの主導権を握ることができる。したがって一般的に親が優位に立ち、子どもは親に従うことが多い。親子といえども人間同士なのだから、一般的な対等な関係がよいのだが、子どもという未熟な特性を考えると、親が子どもを危険から守るためにも親が子どもを支配しなくてはいけない関係になることも必要である。

しかし子どもが大きくなるにつれて子どもは自分で自分のことができるようになり、子どもの裁量権は拡大する。そして親から手が離れるにつれて子どもが自分の世界を持つことができるようになる。そして親子は対等な関係に近づいていく。このような道筋が一般的な見方であろう。

しかし子どもが小さいうちでもできるだけ可能な範囲で子どもの心を尊重し、子どもの裁量権を認めていくことも大切なことである。この場合には親は子どもの言うことをきく立場となる。単に子どもの言い分を認めてやるという感覚ではなく、子どもの意思を尊重するという感覚である。なぜこのような子どもの尊重が大切かというと、支配される関係性を人間は嫌うものだからであり、自分の意思を尊重されることをだれもが望むものだからである。

このように親子の相互作用はある一定の関係性の中で行われていくものである。そこで相互作用のパワー（優位）においては親優位、子ども優位、親子対等の3種類にわけて考えることができる。子どもが小さいうちは親優位であり、子どもが大きくなるにつれて親子対等へと変化する。また相互作用の量という観点では多い、普通、少ない、の3種類にわけて考えることができる。さらに相互作用の質という観点では相互作用における葛藤・対立の量を挙げることができる。相互作用における葛藤・対立の量については多い、普通、少ない、の3種類にわけて考えることができる。

2) 夫婦同士

夫婦の関係性・相互作用においても親子の場合と同様に考えることができる。すなわち、相互作用のパワー（優位）においては夫優位、妻優位、夫婦対等の3種類にわけて考えることができる。相互作用の量という観点では多い、普通、少ない、の3種類にわけて考えることができる。相互作用における葛藤の量については、多い、普通、少ない、の3種類にわけて考えることができる。

3) きょうだい同士

きょうだいの関係性・相互作用においても親子の場合と同様に考えることができる。すなわち、相互作用のパワー（優位）においては上のきょうだい優位、下のきょうだい優位、両者対等の3種類にわけて考えることができる。相互作用の量という観点では多い、普通、少ない、の3種類にわけて考えることができる。相互作用における葛藤の量については、多い、普通、少ない、の3種類にわけて考えることができる。

4) その他の成員（祖父母、など）

その他の成員の関係性・相互作用においても親子の場合と同様に考えることができる。すなわち、相互作用のパワー（優位）においては一方が優位、他方が優位、両者対等の3種類にわけて考えることができる。相互作用の量という観点では多い、普通、少ない、の3種類にわけて考えることができる。相互作用における葛藤の量については、多い、普通、少ない、の3種類にわけて考えることができる。以上の内容を表にまとめた。

表3 家族の対人関係・相互作用の分類

パワー	量	葛藤の量
一方が優位、他方が優位、対等	多い、普通、少ない	多い、普通、少ない

このように家族の人数を無視して論を進めてきたが、①から④までそれぞれ9種類に分類できるため、合計36種類にもなる。このように家族には同じものが2つとない。多様性があるし、家族史や家族差もある。したがって生涯発達の視点に立つ家族援助においては、基本となる原則を守りながらも個々の家族の多様性に即したケースバイケースの対応が大切となる。

ここでの対人関係は家族の発達とともに変化する。例えば親子関係の変化であったり、きょうだい関係の変化であったりする。こうした関係の変化には家族差がありながらも一般的な発達の变化が存在していると考えられる。

3. 両親を対象とした調査の試み

1) 問題

本調査では子どもをはじめとした家族の成員との関係とその変化を調べることを目的とした。また本調査でも父母の両方を対象（調査協力者）とした。ただし家族の成員内の相互作用ということであれば、きょうだいや同居の祖父母なども対象とすべきであるかもしれない。これは今後の課題である。今回は親からみた家族の相互作用ということになる。また今回もまたサンプル数が少なく、今後の課題としてサンプル数の問題が残されている。

2) 方法

本研究においても身近な保護者に依頼して自由記述式のアンケート用紙を配布し回収した。質問項目は家族の相互作用、すなわち家族内の関わり合いに焦点を当てたものを中心にした。回答の結果は趣旨を損なわない程度に内容をまとめて記述した。

①質問項目

質問項目は林（2005、2006、2007、2008）を参考にしつつ、自作した。質問項目は4種類に分けられる。

第1は「これまで子どもにはどんな接し方を心がけてきましたか。またはこれまで子どもとどんなあそびをしてきましたか。」「自分の子どもへのこれまでの接し方に変化はありますか。また変化のきっかけは何ですか。」という親子の相互作用に関する項目である。「何かの判断・決定はどのように行われますか。たとえば子どもへのおやつとの与え方、テレビの視聴などはだれかが決定するものですか、または話し合って決めるものですか。」という決定権に関する項目も作成した。

第2は「(夫婦で子育てしている方へ) 夫婦で子どもについてどんなことを話し合ってきましたか。夫婦で子どもについての会話の内容に変化がありましたか。また変化のきっかけは何ですか。」という夫婦の相互作用に関する項目である。

第3は「(子どもが2人以上いる方へ) 子ども同士・きょうだい同士はどんな関係・あそび・接し方・かかわり方ですか。」「(子どもが2人以上いる方へ) 子どもたちが大きくなるにつれて子ども同士・きょうだい同士の関係・接し方・かかわり方に変化がありましたか。」

また変化のきっかけは何ですか。」というきょうだい同士の相互作用に関する項目である。

第4は「(祖父母がいる方へ。同居・別居を問いません) 祖父母は子どもたちとどんな接し方・かかわり方をしていますか。」「(祖父母がいる方へ。同居・別居を問いません) 祖父母の子どもたちとの接し方・かかわり方に変化はありますか。また変化のきっかけは何ですか。」という祖父母の相互作用に関する項目である。

最後に「子どもとの接し方・かかわり方において今後どのような問題が考えられますか。」という今後の展望についての項目も作成した。

②調査協力者

調査協力者は父または母とした。フェイスシートにおいて子どもの人数および年齢、そして家族が3世代家族か核家族か、その他かを尋ねた。

合計11名(父が回答したものが1名。母が回答したものが10名)。子どもの人数が1人が1名。子どもの人数が2人が7名。子どもの人数が3人以上が3名。2世代家族(核家族)が5名。3世代家族が6名。

子どもの年齢は1歳以上2歳未満が2名(子どもの人数、以下同様)、4歳以上5歳未満が2名、5歳以上6歳未満が4名、6歳以上7歳未満が3名、7歳以上8歳未満が2名、8歳以上9歳未満が3名、9歳以上10歳未満が1名、10歳以上11歳未満が2名、11歳以上12歳未満が3名、12歳以上が2名、合計24名。以上のように小学生以上の子どもがいる家庭が多かった。このことより乳幼児の家庭よりも家族の歴史(家族史)が長いことになる。家族史が長いことにより家族の個性(家族差)も違ってくると思われる。

3) 結果と考察

①親子の相互作用に関する項目について

1) これまでの接し方について

「これまで子どもにはどんな接し方を心がけてきましたか。またはこれまで子どもとどんなあそびをしてきましたか。」という項目に対して、親が回答した子どもとの接し方の心がけとしては「悪いことをしたら怒る、笑顔で接する、子どもの目線に合わせて話す、感情的に怒らないように、きょうだいで比べない、厳しくしつける、できるだけ怒らない、自由に遊ばせて時々手伝う、1人の人間として接する、できるだけ体を使う遊びをする、～でなければとこだわりすぎない、大丈夫だよ・よくがんばったね・がまんしたね・ありがとうなどのことばを意識的に使う、子どもの話をよく聞く、自分が悪いときは謝る」などが挙げられた。

これより親たちの多くは子どもとの接し方において、何らかの心がけていることがあると考えられた。

接する具体的な内容としては「紙を使って制作、なわとび、自転車、散歩、トランプ、ゲー

ム、TVゲーム、ボードゲーム、外遊び、料理、手芸、ゲーム機は与えない、食後にゲーム」などが挙げられた。

これより親たちはできるだけ子どもと遊ぼうとしていることがうかがえた。しかも子どもを受け入れて対応していくように心がけたり、子どもの目線に合わせたり、体を使ったあそびを心がけたり、保育・教育における基本的な態度といえるような対応を心がけていることが伺えた。

2) 接し方の変化ときっかけ

親の子どもへの接し方の変化ときっかけの回答としては「子どもが反抗したり無視したりするようになったため怒ることが多くなった、祖父母との同居により接し方が変化した、接し方を本で学び変化した、まだ変化はない」などが挙げられた。

これより親は子どもの成長に伴い子どもとの接し方において変化を感じていることがうかがえた。特に子どもの成長に伴う問題の発生があると思われた。つまり子どもの成長に伴う発達の危機があると、親は子どもへの接し方を変えなければならなくなる。反抗期を迎えた子どもはこれまでの自分の人格的なものを壊して新しい自分作りに向けて大きく成長しようとする。こうしたときに親がそうした子どもの変化に合わせて親の接し方を変えていかなければならなくなることもある。したがって子どもが成長すれば親の接し方が変化するといえる。

しかし変化について回答のないものもあった。このことから接し方の変化を意識しづらい点もあるのではないかと考えられる。子育ては長年にわたり行われていくものであり、そうした長期的な変化は今回の調査では親たちが意識化しなかったかもしれない。子育ての中で印象が特に強く残っていることや、現在の子育てで取り組んでいることがなければ過去と現在の変化を意識化することは必要性がなく記憶にも残りにくいものである。

3) 決定に関する項目

「何かの判断・決定はどのように行われますか。たとえば子どもへのおやつとの与え方、テレビの視聴などはだれかが決定するものですか、または話し合って決めるものですか。」という決定権に関する項目に対しては「おやつは親が決めて成長とともに話し合う、おやつは母親が決めてテレビは子どもが選ぶ、おやつとテレビは母親が決める、幼児期は母親が決めて小学生からは話し合う、テレビやゲームは小学校低学年のうちは母親が決めて高学年からは話し合い中学校からは自己管理させる、テレビを見る時間を話し合う、親たちで決めて伝える、親子で話し合って決める、母親が子どもの希望をききながら決める」などが挙げられた。

これより親が決めていく場合と子どもと話し合って決めていく場合があることがわかる。子どもの成長につれて話し合いや自由選択など決定権が変化している。おやつについては親が何を与えるか決定していることが多くあった。特に母親が関与していることが多

かった。おやつについて親の子どもへの支配が強くなっているのは、おやつは食べ物であり成長に大きく影響を与えると考えているからではないかと思われる。そこで子どもの判断にまかせず親が選択して与えているのである。

これに対してテレビに関しては子どもの成長にあわせて内容や時間を話し合っ決めていくようになることが伺えた。特に子どもが大きくなるにつれて子どものテレビに対する自己裁量が多くなる傾向があると思われた。テレビは年齢に応じてある程度本人の好みに任せてもよいということである。このことから親たちは子どもの成長に合わせて子どもとの関わりを変化させていこうとしていることが伺える。親たちも子どもの発達や子育てに関する知識を親なりに持っており、その知識を活用しながら子育てをしているのである。

テレビについては子どもの好みとの衝突があつて親としては困ることもあるだろう。話し合うが対立したときにどのように解決するのか、どの家庭でも苦勞するところではないだろうか。

②夫婦の相互作用に関する項目について

「(夫婦で子育てしている方へ) 夫婦で子どもについてどんなことを話し合ってきましたか。夫婦で子どもについての会話の内容に変化がありましたか。また変化のきっかけは何ですか。」という夫婦の相互作用に関する項目に対しては「うそをつくなど悪いことをしたとき話し合う、園・学校へ入るといふ節目の時に話し合う、夫が帰宅したらその日の出来事話す、今後の習い事、今日の出来事、子どもができるようになったこと、予防接種、今の子どもたちに何が必要か、人としての心の教育、本人に考えさせるようにすること、夫とともに成長を喜ぶ、子育ての愚痴、夫婦が仲良いこと」などが挙げられた。

これより夫婦では子どものことについて様々な内容のことを話し合っていると考えられた。話し合う内容については日常的な出来事の報告・連絡事項と、今後の子育ての方向性・方針の検討・問題解決を目指す時間をかけた話し合い・相談とがあると思われる。さらに愚痴を話すことによる効果もあると思われる。

ただし夫婦であっても互いが忙しくゆっくり話し合っている時間を持ってないことも多いが、そんなときには子どもの成長の節目（入園・入学・卒園・卒業など）あるいは問題が発生したときに話し合う機会とすることが有効だろう。また夫婦の関係が良好であることも大切なことであろう。

ここでは夫婦関係の発達、つまり変化を示唆するものはみられなかった。長期的には発達していると理論的には考えられるが、子育て期の短期間では自分たちの変化を自ら実感しにくい意識しにくいものだということなのかもしれない。

③きょうだい同士の相互作用に関する項目について

「(子どもが2人以上いる方へ) 子ども同士・きょうだい同士はどんな関係・あそび・接し方・かかわり方ですか。」というきょうだい同士の相互作用に関する項目に対しては「仲

良く遊んでいる、毎日けんかする、下の子をあやす、下の子を世話する、きょうだい仲の良い時悪い時がある、ライバル関係、ゲームする、野球、サッカー、カードゲーム、キャラクターの人形遊び、年齢が離れておりけんかは少ない、きょうだい同士で何でも話せる」などが挙げられた。

またきょうだい関係の複雑さを示すものとして3人きょうだいの例が挙げられた。

これよりきょうだい同士の相互作用は活発であると親たちは回答していることがわかる。きょうだい同士は身近な仲の良いあそび仲間でもある。しかも親に代わって世話をしてくれることもある。このことはきょうだいの長所であるが、きょうだいけんかなどの問題も引き起こす。きょうだい関係には年齢・性別の違いも影響がある。もちろんきょうだいのこうした関わりを通して発達していくわけであるが、きょうだいによる家族関係の複雑化は前にみたように存在する。きょうだいがいることにより家族は複雑な関係になっていくのである。親はきょうだい関係に取り組む必要がある。

「(子どもが2人以上いる方へ) 子どもたちが大きくなるにつれて子ども同士・きょうだい同士の関係・接し方・かかわり方に変化がありましたか。また変化のきっかけは何ですか。」というきょうだいの変化に関する項目に対しては「きょうだいで考えたり遊んだりすることが増えた、おもちゃの取り合いやけんかが増えた、口げんかが多くなった、上の子が大きくなると自分の時間をもつようになり下の子と遊ばなくなった、学校へ行くようになった第1子は1人で行動することが多くなった、兄と妹なのでいつも一緒というわけにはいなくなった、変化したかよくわからない」などが挙げられた。

これより親は子どもたちの成長につれてきょうだい関係が大きく変わることが実感されていることがわかる。このように親が発達の変化を実感しているのは夫婦の場合とは違い第3者的にきょうだいを眺めることができるためであろうか。家族の中できょうだい関係もまた発達しているといえる。年齢の差の大小や性別の異同も影響していると思われるが、発達のコースとしては、相互作用の増加→きょうだいけんかの発生→相互作用の減少、というものがあるのではないか。つまり年齢が大きくなるにつれて関わりが穏やかになって活発さが減少していくということである。

④祖父母の相互作用に関する項目について

「(祖父母がいる方へ。同居・別居を問いません) 祖父母は子どもたちとどんな接し方・かかわり方をしていますか。」という祖父母の相互作用に関する項目に対しては「やさしい、受容してくれる、親ほど厳しくない、とてもかわいがってくれる、なぐさめてもらえる、公共のマナーは厳しい、昔の遊びを教える、よい遊び相手、親に叱られた時の逃げ場、親に協力してくれる、余計な口出しがない、親の方針を尊重してくれる、甘やかしがち、欲しがる物をすぐ買ってしまう」などが挙げられた。

これより祖父母は子育てにとって役立っている面と、親たちとの方針の違いから対立を生む面とがあることが伺えた。しかし祖父母の存在自体はなにかと手のかかる子育てには

ありがたいことも多いものである。また子育ての知識の伝承、あそびや文化の伝承、家事全般にわたる援助・助言など、祖父母ならではの役割があるように思われる。祖父母は同居・別居を問わず、子育てにおいて大きな役割を持っているはずであると考えられる。孫・子どもの誕生・成長と一緒に喜んでくれることをはじめとして子育てにおいては身近にいる重要な一員・援助者であると思われる。

「(祖父母がいる方へ。同居・別居を問いません) 祖父母の子どもたちとの接し方・かかわり方に変化はありますか。また変化のきっかけは何ですか。」という項目に対しては「子どもの成長とともに会話が増えた、下の子が生まれると上の子に厳しくなった、変わらない」などが挙げられた。

これより祖父母にとっても子どもの成長は接し方を変化させるものとなるものであり、子育てしている家庭においては発達的变化が家族全体に及んでいることを伺わせた。

⑤今後の展望についての項目について

「子どもとの接し方・かかわり方において今後どのような問題が考えられますか。」という今後の展望についての項目に対しては「親のことは使い・態度が子どもに影響すること、中学・高校へ行くと学校のことを話してくれなくなること、地域との関係が希薄で親の学び合いが少ないこと、子どもの自我がでてきたので対応が難しくなってきたこと、性格のこと、子どもに有害な商品が氾濫していること、親が与えたくない物でも子どもが欲しがること」などが挙げられた。

これより子どもの心身の成長・発達に伴う不安、子どもを取り巻く環境への不安がうかがえた。くるまの多い道路、身近なところにある安全な自然の少なさ、夜型の社会、子どもにとって有害な商品・メディア、大人中心の価値観の社会の問題など現代日本は子どもにとって暮らしやすい社会環境にはなっていない。子どもにかかる費用の多さなどは最も子育てしにくい原因である。

親の回答からは子どもの発達に伴って新しい問題が生じてくることが不安として挙げられている。こうした子どもの成長とともに親は対応の仕方を変化させなければならない。

文献

- 林 昭志 2005 親を生涯発達の観点から捉える心理学的研究の試み 上田女子短期大学紀要 第28号 pp.11-18.
- 林 昭志 2006 親を生涯発達の観点から捉える試み——乳幼児期の親の発達について—— 上田女子短期大学紀要 第29号 pp.1-9.
- 林 昭志 2007 親を生涯発達の観点から捉える試み（その3）——親の発達権と家族の発達—— 上田女子短期大学紀要 第30号 pp.19-28.
- 林 昭志 2008 親を生涯発達の観点から捉える試み（その4） 上田女子短期大学紀要 第31号 pp.27-36.